



タイ科魚類の一属 *Amamiichthys* Tanaka and Iwatsuki, 2015 に適用すべき和名

和田英敏¹・本村浩之²

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学大学院連合農学研究科（鹿児島市）
gd120300@gmail.com (corresponding author)
² 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）
motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp

Received 16 March 2021
Revised 16 March 2021
Accepted 16 March 2021
Published 17 March 2021
DOI 10.34583/ichthy.6.0_48

Hidetoshi Wada and Hiroyuki Motomura. 2021. Assessment of the standard Japanese name for the sparid genus *Amamiichthys* Tanaka and Iwatsuki, 2015. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 6: 48–50.

Abstract

The monotypic sparid genus *Amamiichthys* Tanaka and Iwatsuki, 2015 (type species: *Cheimerius matsubarai* Akazaki, 1962) has currently been regarded as a distinct genus, although the type species was treated as a member of the genus *Cheimerius* Smith, 1938. The standard Japanese name “Hoshirenko-zoku” is proposed for *Amamiichthys* in this study since Japanese names for the two genera have been confused in Japanese literature.

タイ科 Saparidae は全世界の温帯から熱帯の汽水・海水域に広く分布しており（赤崎, 1962; Bauchot and Smith, 1983; Carpenter, 2001）, 現在までに 39 属が知られている（Fricke et al., 2021）. 本科魚類は日本国内において 7 属 14 種が知られており（藤原ほか, 2017; 本村, 2021）, このうちホシレンコ *Amamiichthys matsubarai* (Akazaki, 1962) (Fig. 1) は背鰭が 12 棘 10 軟条で第 3・4 棘が他の棘と比較して明瞭に長く、糸状に伸長する、臀鰭が 3 棘 8 軟条、側線有孔鱗数が 58–61、前鰓蓋骨後下縁部に鱗をもたない、生鮮時の体色が桃色で、体側面に円形または瓢箪状の青色斑が散在する、および尾鰭後縁に黒色域をもたないなどの形態的特徴により本科の他種から容易に識別される（Tanaka and Iwatsuki, 2015）. 本種はタイ科魚類の中では極めて局所的な分布域をもつ稀種として知られており、これまでに模式産地である奄美大島近海を除いた海域では記録されていない（Tanaka and Iwatsuki, 2015; 中村, 2018,

2019; Fujiwara and Motomura, 2020）.

ホシレンコの帰属は長らく *Cheimerius* Smith, 1938（タイプ種：*Dentex nufar* Valenciennes, 1830）とされていたが、Chiba et al. (2009) と Santini et al. (2014) は分子系統解析の結果、*Cheimerius* は多系統であり、*C. matsubarai* と *C. nufar* がそれぞれ異なる系統群に内包されることを指摘した。その後 Tanaka and Iwatsuki (2015) は *C. matsubarai* と *C. nufar* が前述の分子系統学的位置づけと、両顎歯や神経頭蓋などの形態的特徴において属レベルで識別可能であることを根拠に、*Cheimerius matsubarai* Akazaki, 1962 をタイプ種として *Amamiichthys* Tanaka and Iwatsuki, 2015 を提唱し、本属にホシレンコ *A. matsubarai* のみを認めた。しかし、*Amamiichthys* に適用すべき和名に関しては、Tanaka and Iwatsuki (2015) や近年の論文による言及がなされていないため、本研究では、本属に適用すべき学名について記述する。

材料と方法

本稿で言及した機関略号 KAUM と MUFS の標本はそれぞれ鹿児島大学総合研究博物館と宮崎大学農学部に収蔵されている。ホシレンコの標本写真（KAUM-I. 53888, 標準体長 364.6 mm, 奄美群島喜界島近海, 2013 年 5 月 7 日, 松沼瑞樹, 鹿児島市中央卸売市場にて購入）は Fig. 1 に示した。

Cheimerius の設立と和名に関する経緯

Dentex nufar Valenciennes, 1830 は紅海産の 11 標本に基づき記載された。その後 Smith (1938) は *D. nufar* が上顎前部と下顎にそれぞれ 4 本と 6 本の犬歯状歯をもつ、両顎側部に 1 列の円錐歯をもつ、背鰭第 3–6 棘が糸状に伸長する、頭部背面の鱗域が眼下の中央まで達することなどの複数の形態的特徴により同属他種から明瞭に識別されることから、*D. nufar* をタイプ種として新属である *Cheimerius* を設立した。赤崎 (1962) は *Cheimerius* に対して和名セナガキダイ属を適用し、本属に北西アフリカ、紅海、および南アフリカに分布するセナガキダイ *C. filusos*



Fig. 1. Fresh specimen of *Amamiichthys matsubarai* (KAUM-I. 53888, 364.6 mm SL) from Kikai-jima island, Amami Islands, Kagoshima Prefecture, Japan.

(Valenciennes, 1841) と、この中で奄美大島産の標本にもとづき新種記載されたホシレンコ *C. matsubarai* の 2 種を新たに含めた。なお、赤崎 (1962) は和名セナガキダイ属を新称としなかった一方で和名セナガキダイを新称として扱ったが、赤崎 (1962) 以前に和名セナガキダイ属が用いられた文献はないため、セナガキダイ属はこの文献によってはじめて *Cheimerius* に対して用いられた和名であると考えられる。現在、和名セナガキダイが適用された *C. filus* は *Dentex gibbosus* (Rafinesque, 1810) の新参異名とされている (Tortonese, 1973; Parenti, 2019)。その後、Tanaka and Iwatsuki (2015) は *C. matsubarai* と *C. nufur* が神経頭蓋や両顎歯などの形態的特徴に加え、両者が分子系統学的位置づけにおいて属レベルで識別され、さらに *C. matsubarai* のこれらの特徴が他のタイ科魚類のいずれの属とも一致せず、属の新参異名も存在しないことから、*C. matsubarai* をタイプ種として新属 *Amamiichthys* を提唱した。なお、*C. matsubarai* の記載に用いられた全てのタイプ標本は、これらの標本が収蔵されていた京都大学みさき臨海研究所 (MIKU) から京都大学総合博物館と舞鶴水産実

験所 (FAKU) への移送の過程で行方不明となっていたため、Tanaka and Iwatsuki (2015) は *Amamiichthys* を提唱する際に *C. matsubarai* のネオタイプ (MUFS 30984, 標準体長 268 mm) を指定した。

Amamiichthys に適用すべき和名の検討

Tanaka and Iwatsuki (2015) は *Amamiichthys* に対して新たに和名を提唱しておらず、適用すべき和名についての議論もおこなっていないが、前述のとおり和名セナガキダイ属は *Cheimerius* に対して提唱されたものであるため (赤崎, 1962), この和名は *Amamiichthys* に対して適用できない。その後、高梨 (2018) はホシレンコに関連する民俗学的研究の過程でホシレンコに対して“ホシレンコ属”という属の和名を適用しており、本種がセナガキダイ属と帰属が異なるという見解を示しているが、学名との対応については言及していない (高梨, 2018: 131)。中村 (2018, 2019) はホシレンコ *A. matsubarai* に対して和名セナガキダイ属を用いているものの、この和名を使用した経緯については言及していない。このように *Amamiichthys* に対して適用す

べき和名について適切に検討を行った報告はこれまでになく、本属に対して学名との対応を含めて和名を提唱した研究もない。

日本魚類学会によって提唱されている「魚類の標準和名の命名ガイドライン」の4.2.1条によると、属階級群の標準和名には「原則としてタイプ種の標準和名を適用すべきである」とされているため、本研究では *Amamiichthys* に対して新標準和名ホシレンコ属を提唱する。

謝 辞

本報告を取りまとめるにあたり、Ronald Fricke 博士(シュツットガルト州立自然史博物館)と田中文也博士(マリノリサーチ株式会社)には貴重な文献を提供していただいた。鹿児島大学総合研究博物館ボランティアの皆さまと同博物館魚類分類学研究室の皆さまには適切な助言を頂いた。以上の方々に対し、謹んで感謝の意を表す。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島県産魚類の多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は JSPS 科研費(26241027, 26450265, 20H03311)、JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型、国立科学博物館「日本の生物多様性ホットスポットの構造に関する研究プロジェクト」、文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」、および鹿児島大学重点領域研究環境(生物多様性・島嶼プロジェクト)学長裁量経費の援助を受けた。

引用文献

赤崎正人. 1962. タイ型魚類の研究 形態・系統・分類および生態. 京大みさき臨海研究所特別報告, 1: 1–368.

Bauchot, M. L. and M. M. Smith. 1983. Sparidae, pp. 1–11. In Fisher, W. and G. Bianchi (eds.) FAO species identification sheets for fisheries purposes. Western Indian Ocean (Fishing Area 51). FAO, Rome.

Carpenter, K. E. 2001. Family Sparidae, pp. 2990–3003. In Carpenter, K. E. and V. H. Niem (eds.) Species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific. Vol. 5. Bony fishes part 3 (Menidae to Pomacentridae). FAO, Rome. (<http://www.fao.org/3/y0770e/y0770e00.htm>)

Chiba, S. N., Y. Iwatsuki, T. Yoshino and N. Hanzawa. 2009. Comprehensive phylogeny of the family Sparidae (Perciformes: Teleostei) inferred from mitochondrial gene analyses. *Genes and Genetic Systems*, 84: 153–170. (https://www.jstage.jst.go.jp/article/ggs/84/2/84_2_153/_article)

Fricke, R., W. N. Eschmeyer and R. van der Laan (eds.). 2021. Eschmeyer's catalog of fishes: genera, species, references. <http://researcharchive.calacademy.org/research/ichthyology/catalog/fishcatmain.asp> (13 Mar. 2021)

藤原恭司・伊東正英・本村浩之. 2017. 鹿児島県から得られた日本初記録のタイ科魚類 *Acanthopagrus taiwanensis* イワツキクロダイ(新称). *魚類学雑誌*, 64: 107–112. (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jji/64/2/64_64-107/_pdf/-char/ja)

Fujiwara, K. and H. Motomura. 2020. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of Kikai Island in the Amami Islands, Kagoshima, southern Japan, with 259 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 14: 1–73. (https://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/2020_12_KikaiFishes.pdf)

本村浩之. 2021. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 8. (https://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/20210314_JAFList.xlsx)

中村潤平. 2018. タイ科, pp. 178–179. 本村浩之・萩原清司・瀬能宏・中江雅典(編)奄美群島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島, 横須賀市自然・人文博物館, 横須賀, 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原, 国立科学博物館, つくば. (https://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/Amami_highres.pdf)

中村潤平. 2019. タイ科, pp. 181–182. 本村浩之・萩原清司・瀬能宏・中江雅典(編)奄美群島の魚類図鑑. 南日本新聞開発センター, 鹿児島.

Parenti, P. 2019. An annotated checklist of the fishes of the family Sparidae. *FishTaxa*, 4: 47–98. (<http://fishtaxa.com/index.php/ft/article/download/4-2-5/133>)

Santini, F., G. Carnevale and L. Sorenson. 2014. First multi-locus timetree of seabreams and porgies (Percomorpha: Sparidae). *Italian Journal of Zoology*, 81: 43–54. (<https://www.tandfonline.com/doi/pdf/10.1080/11250003.2013.878960?needAccess=true>)

Smith, J. L. B. 1938. The South African fishes of the families Sparidae and Denticidae. *Transactions of the Royal Society of South Africa*, 26: 225–305.

高梨 修. 2018. タイ釣りをする古代人, pp. 129–133. 高宮広土(編)奄美・沖縄諸島先史学の最前線. 南方新社, 鹿児島.

Tanaka, F. and Y. Iwatsuki. 2015. *Amamiichthys*, a new genus for the sparid fish *Cheimerius matsubarai* Akazaki 1962, and redescription of the species, with designation of a neotype. *Zootaxa*, 4007: 195–206. (<http://pdfs.semanticscholar.org/3301/9d75f3d1fb9ddce7c59b4c497c39f772adb8.pdf>)

Tortonese, E. 1973. Sparidae, pp. 405–415. In Hureau, J.-C. and T. Monod (eds.) Check-list of the fishes of the North-eastern Atlantic and of the Mediterranean. Vol. 1. UNESCO, Paris.